

臨床看護学

1 構成員

	平成18年3月31日現在
教授	2人
助教授	2人
講師（うち病院籍）	5人（0人）
助手（うち病院籍）	8人（0人）
医員	0人
研修医	0人
特別研究員	0人
大学院学生（うち他講座から）	19人（0人）
研究生	0人
外国人客員研究員	0人
技術職員（教務職員を含む）	0人
その他（技術補佐員等）	0人
合 計	0人

2 教員の異動状況

野澤 明子（教授）（H13. 8. 1～現職）
 大見サキエ（教授） 昇任 H17. 4. 1（H16. 4. 1採用）～現職
 片岡 純（助教授）（H16. 4. 1～H18. 3. 31）
 久保田君枝（助教授）（H17. 4. 1～現職）
 白尾久美子（講師）（H14. 4. 1～H18. 3. 31）
 安田 孝子（講師）（H16. 4. 1～現職）
 永井 道子（講師）（H16. 10. 1～現職）
 青木由美恵（講師）（H16. 4. 1～H18. 3. 31）
 宮城島恭子（講師） 昇任 H17. 4. 1（H14. 4. 1採用）～現職
 佐藤 直美（助手）（H9. 8. 1～H18. 3. 31, H18. 4. 1～講師）
 村上 静子（助手）（H13. 4. 1～H18. 3. 31）
 安藤千英子（助手）（H15. 4. 1～H17. 8. 31）
 杉山 琴美（助手）（H16. 4. 1～現職）
 足立 智美（助手）（H16. 4. 1～現職）
 村松 妙子（助手）（H17. 4. 1～現職）
 岩田 尚子（助手）（H17. 10. 1～現職）
 瀬戸口希根（助手）（H17. 5. 1～現職）

3 研究業績

数字は小数2位まで。

	平成17年度
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	4編 （ 3編）
そのインパクトファクターの合計	6.87
(2) 論文形式のプロシーディングズ数	2編
(3) 総説数（うち邦文のもの）	0編 （ 0編）
そのインパクトファクターの合計	0
(4) 著書数（うち邦文のもの）	4編 （ 4編）
(5) 症例報告数（うち邦文のもの）	0編 （ 0編）
そのインパクトファクターの合計	0

(1) 原著論文（当該教室所属の者に下線）

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 大見サキエ：患者 - 看護者間における相互の自己開示 — 面接調査による看護者の認識 —, 日本看護学教育学会誌, 15(1), 73-87, 2005.
2. 大見サキエ・川出富貴子・岩瀬貴美子・臼井徳子・鍵小野美和：看護学生が抱く入院患児の母親への「思い」 — 母親との関係形成支援のために — 日本小児看護学会誌, 14(2), 71-76, 2005.
3. 宮城島恭子, 大見サキエ：思春期の小児がん患者の日常生活における自己決定の患児と母親の捉えかた, 日本小児がん看護学会誌, 第1号, 1-12, 2006.

インパクトファクターの小計 [0.00]

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1. Wang J, Kataoka H, Suzuki M, Sato N, Nakamura R, Tao H, Maruyama K, Isogaki J, Kanaoka S, Ihara M, Tanaka M, Kanamori M, Nakamura T, Shinmura K, Sugimura H: Downregulation of EphA7 by hypermethylation in colorectal cancer. Oncogene 24: 5637-5647, 2005.

インパクトファクターの小計 [6.87]

(2) 論文形式のプロシーディングズ

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 久保田君枝, 永谷実穂, 望月聖子, 須佐智子, 小川早苗：「主体的な出産」を支援する助産師のセルフエスティーム — S県内の助産師の調査より — 第36回日本看護学会論文集 — 母性看護 —, 65-67, 2005.

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. 荒木田美香子, 白井文恵, 奥野裕子, 鈴木志津江, 永井道子, 山名れい子：中学生を対象としたコミュニケーション教育プログラムとその効果の検討 大阪大学看護学雑誌 12(1)：55-62, 2006.

(4) 著 書

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 野澤明子：循環機能障害に伴う成人への援助，成人看護学，財団法人放送大学教育振興会，74-100，2005.
2. 野澤明子：認知機能・コミュニケーション障害に伴う成人への援助，成人看護学，財団法人放送大学教育振興会，186-210，2005.

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

1. 片岡 純：Ⅳ章4 死の受容過程（佐藤栄子監修 中範囲理論入門）pp255-265，日総研，東京，2005.
2. 片岡 純：悪性リンパ腫（ホジキン病）罹患の人の看護，（佐藤禮子監修 実践看護技術学習支援テキスト 成人看護学Ⅱ），pp147-150，日本看護協会出版会，東京，2006.

4 特許等の出願状況

	平成17年度
特許取得数（出願中含む）	0件

5 医学研究費取得状況

	平成17年度
(1) 文部科学省科学研究費	8件 (1,241万円)
(2) 厚生科学研究費	0件 (0万円)
(3) 他政府機関による研究助成	0件 (0万円)
(4) 財団助成金	1件 (200万円)
(5) 受託研究または共同研究	1件 (52.8万円)
(6) 奨学寄附金その他（民間より）	0件 (0万円)

(1) 文部科学省科学研究費

白尾久美子（代表者）基盤研究（C）新人看護師の職場適応を促進するためのプログラムの開発と導入の検討 160万円（新規）

佐藤直美（代表者）若手研究（B）遺伝子診療部における看護実践基準についての検討 41万2,413円（育児休業復帰後継続）

青木由美恵（代表者）萌芽研究 臨床看護実践に伴うリフレクションの構造とリフレクションを活用した教育方法の開発 110万円（新規）

安田孝子（代表者）萌芽研究 つわり症状のある妊婦へのつぼ刺激の有効性 240万円（新規）

大見サキエ（代表者）萌芽研究 がんの子どもと家族の教育支援のための連携システムモデルの開発 230万（新規）

宮城島恭子（代表者）若手研究（B）がんの子どもの日常生活における自己決定と親子のコミュニケーションを支える看護援助 100万円（新規）

宮城島恭子（分担者）基盤研究（C）在宅療養児の包括的看護の確立にむけたコーディネーター

育成プログラムの開発 120万円 代表者 名古屋大学医学部保健学科奈
良間美保（継続）

大見サキエ（分担者）萌芽研究 つわり症状のある妊婦へのツボ刺激の有効性（分担）17年度
240万（新規）

(4) 財団助成金

佐藤直美（分担者）喫煙科学研究財団 ニコチン依存の形成に關与する要因の研究 — 遺伝子多
型の影響について — 代表者 病理学第一講座 梶村春彦 200万円（繼
続）

(5) 受託研究または共同研究

大見サキエ，宮城島恭子，瀬戸口希根（分担）小児看護学領域における外来看護についての教
育の現状 共同代表者 静岡県立短期大学部
特別研究費助成 52万8千

7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0件	0件
(2) シンポジウム発表数	0件	0件
(3) 学会座長回数	0件	4件
(4) 学会開催回数	0件	0件
(5) 学会役員等回数	0件	7件
(6) 一般演題発表数	5件	

(1) 国際学会等開催・参加

5) 一般発表

ポスター発表

1. M Ito, T Majima, M Sato, M Masujima, J Shibata, Y Kamma, M Kuwabara, N Akimoto, J Kataoka, T Konishi. A qualitative meta-study of the relationship between nurses and cancer patients in Japan. International association for human caring 27th annual conference 2005 (California).
2. J Kataoka, R Sato. The process for malignant lymphoma patients to acquire mastery to overcome their illness, The 5th Hamamatsu-kyungpook joint medical symposium, 2005 (Korea)
3. Aoki Y: Exploring the issues in reflective practice in nursing education. 9th Nursing Research Conference, November 2005, Madrid, Spain.
4. Michiko Nagai, Mikako Arakida: Mental health activity in community; Examination of effects of psychological intervention for junior high school and elementary school student's parents. The 3rd international conference on community health nursing research, Septem-

ber 2005, Tokyo, Japan

5. Mikako Arakida, Miku Yamashita, Michiko Nagai: The development of the mental health service in a manufacturing- From the understanding of the actual state to measures. The 13th international congress on occupational health services, December 2005, Utsunomiya, Japan

(2) 国内学会の開催・参加

4) 座長をした学会名

片岡 純 第20回日本がん看護学会学術集会
白尾久美子 第10回日本看護研究学会東海地方会
大見サキエ 第54回東海心理学会 座長
久保田君枝 第18回静岡県母性衛生学会

(3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

野澤明子 日本糖尿病教育・看護学会 専任査読委員
白尾久美子 日本看護研究学会評議員
大見サキエ 日本看護医療学会 専任査読員
大見サキエ 日本小児看護学会 専任査読員
久保田君枝 日本母性衛生学会評議員・査読委員
久保田君枝 日本看護医療学会評議員
久保田君枝 静岡県母性衛生学会 理事

8 学術雑誌の編集への貢献

	国内	外国
学術雑誌編集数（レフリー数は除く）	0件	0件

9 共同研究の実施状況

	平成17年度
(1) 国際共同研究	0件
(2) 国内共同研究	6件
(3) 学内共同研究	2件

(2) 国内共同研究

佐藤直美, 野澤明子, 相村春彦, 新村和也, 名倉聖子（病理学第一）, 谷岡書彦（磐田市立総合病院臨床検査科）, 吉田輝彦（国立がんセンター研究所腫瘍ゲノム解析・情報研究部）生活習慣とがんの罹患に関する疫学研究

荒木田美香子（大阪大学）, 永井道子 地域と学校の人材活用による児童生徒の心の健康づくりプログラムの開発と評価

大見サキエ, 須場今朝子, 高橋佐智子（愛知県厚生連安城更生病院）がんの子どもと家族に対

する教育支援のための連携システム開発に関する研究 — 研修会の試み —

大見サキエ, 宮城島恭子, 巽あさみ, 本郷輝明, 河合洋子 (名古屋市立大学看護学部), 鈴木恵理子 (聖隷クリストファー大学看護学部) がんの子どもと家族に対する教育支援のための連携システム開発に関する研究

大見サキエ, 宮城島恭子, 瀬戸口希根, 片川智子, 金城やすこ (静岡県立短期大学部) 小児看護学領域における外来看護の教育の現状

奈良間美保, 村上泰子 (名古屋大学), 堀 妙子 (京都橘大学), 宮城島恭子, 田中千代 (北里大学) 在宅療養児の包括的看護の確立にむけたコーディネーター育成プログラムの開発

(3) 学内共同研究

佐藤直美, 相村春彦 (病理学第一), 松井 隆 (附属病院救急部) ニコチン依存の形成に関与する要因の研究 — 遺伝子多型の影響について —

大見サキエ, 巽 あさみ, 片岡 純, 安田孝子 当大学における卒業研究の学習の実態

10 産学共同研究

	平成17年度
産学共同研究	0件

12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. 新人看護師の職場適応を促進するためのプログラムの開発と導入の検討

新人看護師の職場適応を促進するために、彼ら自身がストレス反応を把握し、その要因について客観的に自己評価を行い、具体的な対応策を考えることができることを目標に、新人看護師に対する介入プログラムの実施および評価を行い、介入プログラムの効果を検討する。今年度は、実施に向けて準備を行った。新人看護師に対する介入プログラムの実施と評価は、A総合病院の看護部およびB県厚生連の看護課がそれぞれ主催する、新人看護師研修に協同参加し実施予定である。新人看護師に対する介入プログラムの目標は、自己のストレス反応の把握、ストレス要因に対する客観的評価、コーピングの方略、ストレス緩和要因などについての知識を得て、新人看護師自身が具体的な対応策の試案ができることとした。

(白尾久美子)

2. 遺伝子診療部における看護実践基準についての検討

遺伝子診療部の診療へ参加しながら、その中でのクライアントの反応や終了後の面接を通して、遺伝子診療部における看護実践の要素を明らかにしその基準を検討することを目的としている。これまで7組の遺伝子診療部への受診に同席し、3組のクライアントに診療が終了している時点での面接を行った。遺伝子診療部で看護師に求められる役割としては、対象者の抱える問題を導き出し理解を示すこと、疾患や関係するいろいろな情報を対象者が理解する手助けをすること、対象者の苦悩を理解することなどが考えられた。

(佐藤直美, 野澤明子)

3. 生活習慣とがんの罹患に関する疫学研究

個人の遺伝的素因は生活習慣とともにがんの罹患性に影響を与える。症例対象研究デザインを用いたCommon Cancerの関連遺伝子多型と臨床情報・生活情報の解析により、がんの罹患に関する宿主・環境相互作用を明らかにすることを目的としている。地域総合病院外来にて65歳以上の外来患者で研究の内容等について文書で同意の得られた方を対象に血液の採取・既往歴、生活情報などの聴取を行っている。これまで約1600例のデータを収集した。引き続きデータ収集および遺伝子解析を行う。

(佐藤直美, 野澤明子, 相村春彦, 新村和也, 名倉聖子, 谷岡書彦, 吉田輝彦)

4. ニコチン依存の形成に関する要因の研究

ニコチン依存をはじめとする喫煙行動に対する遺伝子多型の影響について明らかにするために、セロトニントランスポーター (5-HTT) 遺伝子プロモーター領域のins/del多型について、男性499名、女性207名の喫煙行動に関する調査結果と遺伝子解析結果との統計学的分析を行った。その結果、この多型に関しては喫煙行動との関連は示されなかった。

(佐藤直美, 相村春彦, 松井 隆)

5. 学生自己評価から見た本学における看護基本技術の修得状況について

看護基本技術の学習は、看護基礎教育における重要な要素である。しかし、学士課程における技術の修得状況は、十分には明らかにされていない。そこで、看護基本技術学習項目に関する学生の自己評価を調査することにより、技術に関する修得状況の実態を明らかにし、それを基礎資料として今後の教育の充実を検討していく予定である。引き続きデータの収集を行なっていく。

(安藤千英子, 野澤明子, 片岡 純, 白尾久美子, 佐藤直美, 村上静子, 杉山琴美)

6. リフレクションに関する研究

リフレクションを活用した看護教育実践者へのインタビューから、複数のリフレクションの過程における潜在的な問題について明らかにした。

(青木由美恵)

7. 看護師を対象にしたメンタルヘルスを向上させるための研修プログラムの開発と評価

本研究の目的は、看護師を対象にメンタルヘルスに関する調査を行い、看護師の精神的健康に影響を与えている要因を明らかにすることと、その結果から開発された看護師の精神的健康を向上させるためのプログラムを展開し、その効果を明らかにすることである。この期間中には、A総合病院の全看護師273名を対象とした質問紙調査を行い、216名 (79.1%) の回答を得た。解析を進めている段階である。

(永井道子, 佐々木省子)

8. 小児生活習慣病予防事業の今後のあり方に関する研究

A村の小児生活習慣病予防事業の効果を明らかにするために、小学生を対象に行った質問紙調査の内容を分析した。生活改善に向けた健康指導を受けた高学年と受けていない低学年に分け、生活習慣関連指標について解析を行った。その結果、食生活・身体活動・体力に関するいずれにも、小児生活習慣病予防事業の効果があらわれていると評価できるような有意な差は見られなかった。また、インスタント食品の摂取状況は、健康指導を受けているにもかかわらず高学年のグループが有意に高くなっていた。今後、小学生の生活習慣改善のために、健康指導を行う前後の生活習慣関連指標を比較検討するなど、その具体的な効果について検証し、より効果的な健康指導内容を考え提供していく必要がある。

(伊藤澄雄, 村松妙子, 永井道子)

9. がんの子どもと家族に対する教育支援のための連携システム開発に関する研究 — A市の取り組み —

前年度小学校教員のがんの子どもに対する認識を問う質問紙調査の結果をうけ、教員を対象とする研修会を1回実施し、21名参加した。ほとんどの参加者が研修会に参加して、がんについての知識や子どもや家族の気持ち、病院での対応、日常生活での配慮すべきこと等理解が深まり、意識の変化が見られ、このような研修の機会を増やして欲しいとの希望が強かった。また、病院の協力のもと、学校の教員向けにがんの子どもに対する相談窓口を設置し、各小学校教員への周知を促した。

(大見サキエ, 須場今朝子, 高橋佐智子 (愛知県厚生連安城更正病院))

10. がんの子どもと家族に対する教育支援のための連携システム開発に関する研究 — B市の実態調査

B市全域の小学校の教員全てを対象にがんの子どもに対する認識を調査した結果、A市に類似した結果が得られ、研修会等の機会の提供など医療機関との連携の必要性を再確認した。

(大見サキエ, 宮城島恭子, 巽あさみ, 本郷輝明, 河合洋子 (名古屋市立大学看護学部), 鈴木恵子 (聖隷クリストファー大学看護学部))

11. 小児看護学領域における外来看護の教育の現状

全国の全ての看護大学 (128校) および無作為抽出した専門学校 (211校) を対象に、小児看護学領域における外来看護についての講義、実習の有無や内容、時間数、実施しての有効性や問題点等を質問紙にて調査した。その結果、外来看護の講義は比較的实施されているが、外来看護の実習の実施率は低かった。その理由として、実習時間数が少ないこと、施設の受け入れ態勢が整備されていない等挙げた。医療現状として在院日数の減少、在宅への移行が増加、少子化や看護学生の実習体験が減少するなど社会のニーズに応える必要があり、外来実習の意義は理解していても現実に実施できていない現状が明らかとなった。

(大見サキエ, 宮城島恭子, 瀬戸口希根, 片川智子, 金城やすこ (静岡県立大学短期大学部))

12. 当大学における卒業研究の学習の実態

2005年度看護学科4年生を対象に卒業研究についての学習の実態を質問紙にて調査した。回収率が半数と低かったものの、回答した学生のほとんどが卒業研究を通して、研究の意義や目的、研究の一連のプロセスを理解し、今後に役立てたいと思っていた。また、学習にあたって学生の研究動機や目的意識、課題が明確であればあるほど、また、教員の指導が親身で適切であると感じている学生ほど、意欲が高く、達成感、満足感が高かった。学生の興味・関心領域を大切に、指導をより充実させていくことが、基礎看護教育における研究能力を育成することに繋がること明らかとなった。

(大見サキエ, 巽あさみ, 片岡 純, 安田孝子)

13. がんの子どもの日常生活における自己決定と親子のコミュニケーションを支える看護援助

思春期の外来通院中のがんをもつ子どもと、健康な思春期の子どもを対象者とした、意志決定(自己決定)に関する質問紙調査の準備を行い、これまでの探索的な調査研究の成果をもとに、思春期の子どもに共通するような意志決定についての項目および、がんの子どもの意志決定として重要な項目を厳選し、具体的な看護援助につながる調査項目の選定に留意した。今後は、質問紙の信頼性の検討、思春期のがんの子どもの健康な子どもとの比較分析、がんの子どもの意志決定と親の関わりについて、分析して、看護援助の検討を行う予定である。

(宮城島恭子)

14. 在宅療養児の包括的看護の確立にむけたコーディネーター育成プログラムの開発

看護師を対象とした小児在宅療養コーディネーター研修会を、今年度は新たな研修生を募集し計4回開催した。4回すべての参加者は38名だった。研修会は、小児と家族の包括的支援、専門職の連携と社会資源の活用、ケア・システム評価の能力向上を目標に、グループワーク、事例検討、講演を行った。第1回の研修会前(1次調査)、第2回の研修会前(2次調査)、第4回の研修会終了後(3次調査)に、研修生に対する質問紙調査を行い、研修会の効果を検討した。子どものケア、家族のケア、ケアの継続と連携で、3次調査は1次調査より有意に肯定的な変化が生じており、研修会の効果が明らかになった。

(奈良間美保, 村上泰子 (名古屋大学), 宮城島恭子, 堀 妙子 (京都橘大学), 田中千代 (北里大学))